タ　リ　タ　・　ク　ム

“Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」　(マルコ 5：41)

日本聖公会　正義と平和委員会･ジェンダープロジェクト

第 33 号

2019 年 5 月 25 日

〒162-0805
東京都新宿区矢来町 65
日本聖公会管区事務所気付
正義と平和委員会
・ジェンダープロジェクト
℡　03-5228-3171
発行責任者:篠田　茜

みなさんの教会は安全(Safe)ですか。

～人々の祈りに力づけられて～

司祭　クララ　咸允淑(ハムユンスク、沖縄教区)

主の平和。沖縄で司牧している司祭クララ咸允淑(ハムユンスク)と申します。セーフ・チャーチ(Safe Church) に関する内容をご紹介させていただきたいです。セーフ・チャーチ委員会は 3 年間(2017～2019 年)3 回のオフミーティングと 10 回以上のオンラインミーティングを行いました。そのミーティングを通して感じたセーフ・チャーチの活動と役割について私が理解したことをこの紙面を通して分かち合うことができることを願っています。

まず、セーフ・チャーチ委員会(Safe Church Committee)は世界聖公会の国々で深刻な性的虐待の事件が発生したことを知り、その事態の深刻性を認識すると共にこのままでは聖公会が安全ではないと判断いたしました。教会の安全を保障するための措置が必要であるとの声が 2016 年聖公会教会協議会 ACC16(Anglican Consultative Council)で注目を浴びるようになり、セーフ・チャーチ委員会が承認されました。

それからセーフ･チャーチ委員会は世界聖公会の 2019 年 5 月に行われる ACC17 に提出するための聖公会セーフ・チャーチガイドラインを作成いたしました。簡単な作業ではありませんでした。英語圏ではない国ではその社会が認知している単語に対する認識の違いがありました。例えば、日本では「ハラスメント(harassment)」という単語が「虐待(abuse)」より広い概念として使われているようですが、英語圏ではそうではありませんでした。その結果、最終的にガイドラインを見れば、虐待(abuse) が広い範囲として採択されたことが分かります。勿論、その社会で効果的に通用する方法を採択すると思いますが、多様な文化的概念の違いがあるにも関わらず、教会を愛する心と安全な教会を作ろうとする同一目標をもって各自の違いを尊重しながらガイドラインの作成作業を行いました。

セーフ・チャーチ委員会は基本的に傷つける人と傷つけられた人、二人とも神様に愛され尊ばれる存在としての子羊であることを大切にするよう努めました。従って、ガイドラインは誰かを罪びととして定め裁いて、教会の外に追い出すための手段ではありません。教会共同体が安全な教会であるように、特に安全ではない子どもたち、弱い立場の人々が信頼できる最小限の規則がなければ、これは教会全体に対する放任であるという判断によ

って作成されました。教会安全のための活動はこれから始まります。女性と子どもたち、社会的に弱い立場の人々に対する人権認識が弱い多数のアジアとアフリカに「セーフ・チャーチガイドライン」が定着するまで、どれほど長い時間がかかるかは分かりません。皆さまお祈りください。世界はとても暴力的です。暴力的な世の中で私達が仕える聖公会が安心していられる場となり、心を開いていられる神様が守られる場となることを願いお祈りいたします。

教役者コーナー　日本キリスト教婦人矯風会の働きに思うこと

執事 マリア　大和玲子(中部教区)

神学生の頃、日本キリスト教婦人矯風会で実習をさせていただきました。矯風会は今から 133 年前、1886 年に創立された日本最初の女性団体です。その始まりは南北戦争後のアメリカで、過度な飲酒が賭博、売春、暴力を生み出す社会構造に立ち向かった女性たちによる運動でした(Woman's Christian Temperance Union)。Temperance(禁酒、節制)を矯風と訳した日本キリスト教婦人矯風会は、女性解放運動、また、広く社会悪全般と闘う会となります。

1889 年、矯風会初代会頭の矢島楫子が、一夫一婦制度を求める建白書を元老院に提出しました。それは権力との直接対峙であり、彼女はお上への抗議であるからと白装束に懐剣を懐におさめていたそうです。一夫一婦制、公娼制度の廃止(政府は国家建設と軍事化のために性売買を管理していた)、後に婦人参政権を求めていくこの運動は、日本における性差別的な抑圧をなくすための戦いに他なりません。

1956 年成立の売春防止法により、売春業者は罰せられることになりましたが、一方で、売春女性の補導、保護更生による防止を唱えながら買春者側の責任を問う処罰規定はありません。現在も後を絶たない、魂の殺人と言える性被害、貧困と女性蔑視に起因する性の商品化、JK ビジネス等の性的搾取の現実は、形を変えても変わらない暴力の構造と差別意識が、今もこの社会に根を張っていることを示しています。

旧約の預言者アモスは、社会の虐げをそのままにする民に向かって「公正と正義を大河のように流れさせよ」と叫びます。公正(ミシュパート)と正義(ツェダーカー)は、地のあらゆるものを生かす神の慈しみの摂理と、人と人、神と人の間の真の関係を維持するための全ての行動を指します。それは要求権と責任、権利と義務双方を含む人格間的関係です。人への公正がないところに神との関係は成り立ち得ないのです。

矯風会は今、DV 防止法等の法改正に向けた取り組み、女性のためのシェルター運営、少女を性搾取や性暴力から守る活動等を行っています。これらは苦しむ人への直接的支援と、知りながら容認している社会へ向けた地道な発信です。その他、アディクション(アルコールを始めとする依存症)問題、平和運動にも取り組んでいます。

「矯風」は設立当時の一般語で、本来あるべき(健やかな)姿に(歪んだものを)戻す、という意味があると聞きました。他人はどうあっても構わないという風潮に抗い、そんなものだと決してあきらめない彼女たちの姿勢に、私もこの地で協働していきたいと願います。

CSW の恵み、未来に向けて

アンナ　金子登美江(日本聖公会管区事務所　総務主事/北関東教区)

3 月 11 日(月)～22 日(金)にニューヨークで行われた国連女性の地位委員会(United Nation Commission on the Status of Women[1]、以下 CSW)及び、3 月 8 日(金)～10 日(日)の超教派や聖公会による事前交流会にアングリカンコミュニオンオフィス(以下、ACO)の聖公会代表団として参加いたしました。

CSW では国連加盟国の政府代表団が討論し合意結論の採択に向けた協議が行われます。その会議と並行し、国連建物内での NGO や各国によるサイドイベントや、国連近隣で行われる NGO によるパラレルイベントが行われ、今年は CSW に約 9 千人が集いました。今回の優先テーマはジェンダー平等及び女性と女児のエンパワーメントのための社会保護

国連前

事務総長によるハイレベルイベント

サイドイベントの様子

ソロモンジャニスさんと

[1] UNCSW(国連女性の地位委員会】:戦後できた国連は女性の人権を重視し、経済社会理事会の中に、政治・市民・社会・教育分野等における女性の地位向上に関し、経社理に勧告・報告・提案等を行う女性の地位委員会を設置。毎年 2～3 月頃に 2 週間の期間でその年のテーマを軸に年次会合を開催。ACC も国連オブザーバーであり、この会合に代表団を送っている。日本聖公会からも 2005 年以降毎年 2 名を派遣している。

システム、公共サービス及び持続可能なインフラストラクチャーへのアクセス。レビューテーマは女性のエンパワーメントと持続可能な開発の関連性(CSW60 の合意結論)でした。

日本聖公会から管区代表を派遣する際、首座主教さま経由で ACO に申請を行うのですが、今回から各管区より 1 名のみ推薦が許され、その中から 8 名(昨年は 25 名が参加)を ACO が選出するという選抜方式に変更となりました。新たなプロセスにて選出された聖公会代表者は、南アフリカ、ガーナ、ブルンディ(残念ながらビザが下りず不参加)、スコットランド、ソロモン諸島、ニュージーランド、米国、日本です。女性デスクよりお声掛けを頂き、勢いで登録したものの、いざ選ばれ、165 ヵ国、40 管区の内の 8 名、アジアからは私 1 人、と考えると様々なことが重荷に感じられました。私では力不足ではないか、アジア人の評判を落とすのではないかなどと、度々自信を喪失し不安に負けそうになりましたが、まさか命までは取られまい、神様頼みましたよと半ば開き直って CSW に臨みました。

私の CSW 参加の目的は、①CSW を通して女性と女児の平等や人権を学ぶこと、②脱原子力利用を訴えること、③多くの方と交流の機会を持つこと、にありました。

①においては毎日多くのサイドイベントやパラレルイベントが開催されていたので興味があるものに参加しました。毎日が新たな学びの連続でした。インド主催のイベントでは、公衆衛生の問題(トイレや生理用品)で生理中は学校に行けない女児が多くいると聞き、女児への不平等さに大変驚かされました。その他のイベントでは高齢女性の貧困、教育の場での不平等、意思決定機関の女性の割合の低さ、性ビジネス、などなど心痛む報告を多数耳にしました。また、行政が法律を整えたとしても現実は程遠い状態にある、私たち NGO がアドボカシー(社会的弱者の状況改善のための働きかけや主張) 活動を積極的に行い、女性の平等を現実のものとしなくてはならない、という話を聞き、行政が守ってくれる訳ではなく、積極的に平等や人権や社会保障を求めていかなくては現状は変わらないのだと改めて認識しました。また、持続可能な開発目標（SDGs）の 17 の目標の 5 番目のゴールは「ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る」ですが、ジェンダーの平等だけが解決すれば全ての人の為に住み易い社会になるのではなく、様々な問題は相互関係にあるので多角的に改善を求めなくてはならないという話も印象的でした。

②ですが、今回のテーマが持続可能なインフラだと知った時、日本聖公会代表として脱原子力利用を訴えたいと思い、日本聖公会の歴史的背景、銀河系のあまたの星のうち地球だけが地表の放射能濃度が低いこと、放射線の人体や生物や環境への影響、再生可能エネルギーの勧めなどを纏めた資料を作成し、持参いたしました。CSW の面白いところは、政府関係者とお会い出来る可能性があるということです。何か良い機会がないかと模索していたところ、日本の外務省と NGO のサイドイベントに川村日本国連大使がいらっしゃいました。これ幸いと、イベント終了後に笑顔で大使に近寄り、脱原子力利用が重要と考えると伝え、資料をお渡ししました。実際にご一読くださるかどうか悩ましいところではありますが、可能性は一つでも多い方が良い筈です。また、ソロモン諸島の政府代表のジャニスさんともお話する機会があり、気候変動が原因で島が水没している、地球温暖化への対応が急務であると伺ったので、日本の原子力発電所は海沿いにあり、高熱の水を海に排出している、それも温暖化の一つの要因だと思うのだが、日本の政府や組織からは脱原子

力利用はなかなか進まない。是非とも諸外国から訴えて欲しいとお願いしました。「再生可能エネルギーへのシフトは膨大な費用が掛かるけれども決断は重要である」と、心強いコメントを頂き、小さな一歩ながらも希望を得ました。

③の多くの方との交流も願っていた以上の出会いがありました。まず、聖公会代表者との交わりです。皆、素晴らしい個性や才能をお持ちで 2 週間の滞在を通して大事な家族となりました。また、ACO のスタッフの皆さまにも多大にお支え頂きました。心から感謝です。米国聖公会の方々とも交流を深めることが出来ましたし、MJMNY (メトロポリタン・ジャパニーズ・ミニストリー／在ニューヨーク)とも、これから協働が生まれることを願っています。今回の参加によって、信仰を通して全世界の仲間と繋がっていると実感出来たことは大きなお恵みでした。

怒涛の 2 週間でした。まだ学びを咀嚼できないでいますが、世界中で起きている不平等や人権侵害、女性と女児の平等がより良い社会形成への窓口となること、アドボカシーの重要性、SDGs への取組、男性の参画の必要性、信仰を通した交わりなど、想像を上回る様々なことを学ぶ機会となりました。また、私には日本はおろか世界中に聖公会の仲間がいて、何においても一人ではないことを実感できたのも大変なお恵みでした。CSW への参加が終わりではなく、これからも女性と女児の平等の希求は継続していきます。皆さまと一緒に女性と女児の平等、すなわち、より良い社会の創造を求めていけたらと願っています。最後になりましたが、派遣に際しお支えお励ましくださった多くの方々に心より感謝申し上げます。主の平和がありますように。

婦人伝道師シリーズ　⑤　林歌子の選択

アグネス　北川規美子（大阪教区）

前号で濃尾地震の時にボランティアとして駆けつけた宣教師のこと、また彼らが日本の社会福祉に大きな影響を与えたことを記しました。林歌子も濃尾地震の後、兵庫県赤穂郡にあった博愛社（児童養護施設）に赴いたことを記しましたが、今回は歌子が福祉の途を選択したことを心を留めながら、日本聖公会初期の女性たちの働きに思いを寄せてみました。

大阪の聖贖主教会は博愛社の敷地内に在りますが、教会の入り口には次のようなタブレットが掛けられています。**「林歌子女史は　日本聖公会婦人補助会の創設者、又、熱心なる育成者にて、殊に明治四十一年中央本部結成なるや、会長として、三十余年間、伝道地補助の大任を完ふせられ、補助会〇達史上に、大いなる足跡を印せられた。今其の功績を讃へ之を記念す。昭和二十五年五月二十日　日本聖公会婦人補助会」。**これは日本聖公会婦人補助会（以下婦人会）が歌子の働きを感謝して記念したものですが、わたしは歌子が婦人会の創設者と記されているところが気になっていました。それは以前より、婦人会は小宮珠子により「メリーの友の会」として 1892 年 11 月に発会したこと、そしてまた、歌子が同年 8 月には兵庫県赤穂郡にあった博愛社に赴いていたことを聞いていて、婦人会の創設時に歌子が関わっていたという認識がなかったからでした。

『息吹をうけて―聖公会婦人の戦後史―』*1には「北東京や京都地方部で「婦人補助会」の核作りが始まった」(37 頁)。また歌子自身の記録から「翌 27 年には東京に、大阪に婦人補助会の意味にて集会は催され」(38 頁)と記されています。明治 27(1894)年といえば博愛社が大阪に移転してきた年なので、大阪移転後に歌子が婦人会活動を始めた(創設期の範囲)とも考えられますが、歌子は東京を離れる前からネットワークとしての婦人会活動を願っていたのではないかと思っています。

『あかしびとたち』*2の「小宮珠子」の項に次のような記述が見られます。「女史(小宮珠子)はその責任の重いことを感じて、毎朝 5 時に起きて松原昱子(いくこ)、林歌子と三人で聖三一教会に入り、熱心に神に祈った」(262 頁)立教女学院の教職にあった明治 22(1889)年とあるので、珠子 45 歳、歌子 25 歳、昱子 22 歳の時のことです。この記事の 2 年後に濃尾大震災が起き、熱心な要請を受けた歌子は博愛社に向かうことになります。この時の歌子の行動は、あまりにも現実のニーズに即応しているため、わたしは彼女が途を選択するときの思いに心を留めたことがありませんでした。教鞭を執っていることから震災遺児の養育者となること。大きな選択です。おそらく博愛社に向かった歌子は、婦人会を発会したことで覚えられている珠子たちによって祈られていたことでしょう。そしてあえて引き受けた働きの中で、歌子は以前にも増して、共に祈り続けられるネットワークの必要性を実感していったことと思います。

＊1：1991 年発行、日本聖公会婦人会(名古屋聖マルコ教会内)

＊2：日本聖公会人物史、1974 年発行、日本聖公会歴史編集委員会編

コラム　わたしの瞳に映る景色　⑰

トランスジェンダー排除に傾く世界

司祭　アンブロージア　後藤香織(中部教区)

イギリスでは、昨年からトランスジェンダー女性を排除する過激派フェミニストの活動が強まっています。最近のトランスジェンダー排斥の流れは、欧米で先行して始まり、日本にも少なからず影響をあたえています。このような世界的なトランスジェンダー排斥の背後には、同性愛者やトランスジェンダーを社会的に排除しようとするキリスト教が、デマを流している現実があります。キリスト教会は、聖書に同性愛や異性装は赦しがたい罪であると書いてあるという主張を、これからも繰り返して、人々の命のともし火を消し続けることを良として行くのでしょうか？

2018 年 7 月、お茶の水女子大学がトランスジェンダー女子の受験を 2020 年度から認めると発表しました。他の女子大でも検討の動きが広がっていて、今後、受け入れる大学が増える可能性があります。このニュースはテレビや新聞でも好意的に取り上げられました。

ところが、この報道に対して Twitter 上ではフェミニストを自称する女性たちから、「女子大に男子を入れたら女子大の意義が損なわれる」「トイレ、更衣室はどうするんだ？！」等の反対意見が展開されました。

男子を受け入れるとお茶の水女子大学は言っていません。トランスジェンダー女子を受け入れると発表したのです。他には「トランスジェンダーを装った男性が入学したらどうするんだ？！」という批判もありました。また驚かされることに「ペニスを持ったトランスジェンダーが入学することで、在学生の女子が性暴力の被害にあう」という、あたかもトランス女性が性暴力の加害者であるかのような意見まで呟かれたのです。

トランスジェンダー女子は「女子」として受け入れらます。トイレや更衣室が別扱いでは問題です。また、性別を移行することは、大変なことです。男性がトランスジェンダー女子を装って、女子大に入学することに何のメリットがあるのでしょう。

この様な現状を読まれた聖公会の皆さんは、どのように感じられるのでしょうか？

日本聖公会では、カミングアウトをしているトランスジェンダーは、数えられる人数です。カミングアウトをしていない人たちを含めても、多くはありません。わたしたちトランスジェンダーは、これまでも日本聖公会の中で、性別の区別が必要とされる場面で、肩身の狭い思いをしてきました。

トイレは誰も使っていない時を見はからって使い、更衣室は一人だけあてがわれた物置を使い、共同浴場だけの場合には入浴を諦め、宿泊では「特別に」個室を使わせてもらってきました。なるべく嫌な思いはしたくありませんので、教会の行事には参加をしないというのが、わたしたちの選択になっています。

日本聖公会の少なくない方が、トランスジェンダー女性は「元男性」なのだから、昨今の社会の反応はいたしかたないと感じられるのでしょう。

もちろんトランスジェンダー女性を女性として、トランスジェンダー男性を男性として受け入れようと努力をしてくださっている人たちも多くいますので、わたしたちも教会の中で理解のない対応をされても、待っていたのです。

社会では、キリスト教会の LGBT への否定的な現状を尻目に、多様な人々がともに生きるのはすばらしいという受けとめがなされて来ています。しかし、実現は簡単ではありませんので、キリスト教の扇動に惑わされる人々も出てきているのでしょう。社会全体が教会のような状況になりつつある今、わたしたちトランスジェンダーを始めとした性的少数者への対応について、日本聖公会の中でも是非、真剣に考えていただくことが必要不可欠だと思っています。

女性デスクより

◆ACC-17(Anglican Consultative Council／全聖公会中央協議会)が 4 月 28 日～5 月 5 日、世界の聖公会の管区代表を集め香港にて開催されました。日本からは上原榮正沖縄教区主教とともに女性デスク吉谷かおるが出席し、渉外主事ポール・トルハースト司祭の助けを得て議事に加わり、各地の人たちとの交流を深めました。巻頭の記事で咸允淑司祭が紹介してくださった「セーフ・チャーチガイドライン」など日本聖公会の今後にかかわる諸決議にご注目ください。(決議録日本語版は準備中です)

◆9 月 3 日(火)～4 日(水)、第 4 回女性団体連絡協議会を開催する予定です。詳しいご案内

は後日となりますが、プログラムの一部として、3 日 18 時 30 分より「性暴力」をテーマとして､フォトジャーナリスト大藪順子(おおやぶのぶこ)さんの公開講演会を開催いたします。みなさまぜひお越しください。(会場：牛込聖公会聖バルナバ教会)

ジェンダープロジェクトより

❖大韓聖公会の女性たちのニュース：韓国キリスト教協議会の両性平等局に合わせて活動していたが、名称を女性局に変更し、新女性局長として金姫英(キムヒヨン)司祭が選ばれ、前両性平等局長閔淑姫(ミンスッキ)司祭は NCCK(韓国キリスト教協議会)女性委員長に選ばれました。女性局の事業としてクィア神学、性的少数者への宣教課題に取り組んでいます。

第 27 回　聖公会「女性」フォーラムのご案内

テーマ：手放す　ゆだねる　受け入れる

「必要なことはただ一つだけである。」ルカによる福音書 10:42

「どれにしようかな　かみさまのいうとおり♪」

答えはすでに決まっているのに、　神様の承認がほしくて子どもたちは唱えます。

あの頃のように、神様を信じて楽にくらしましょ。

ならまちのゆったりした時間に身を任せて、気持ちリセット！

日時：2019 年 7 月 14 日(日)~15 日(月・祝)（受付/15 日 15：30　解散/15 日 15：00）

会場：日本聖公会　奈良基督教会　〒630-8213　奈良市登大路町 45

近鉄奈良駅下車または JR 奈良駅からバス市内循環外周りで「近鉄奈良駅」下車、東向き商店街入る徒歩 3 分

【申し込み締め切り】　6 月 16 日（日）

【申し込み先】「女性フォーラム準備会」FAX 0742-23-6774（奈良基督教会）

〇問い合わせ先　小野恭子　i_my_me_kyoko@yahoo.co.jp

佐分利みどり・井田涼子　電話 0742-22-3818（奈良基督教会）

〇参加費 2500 円＋食費 2500 円（15 日夕食）＋500 円（16 日昼食）

＊部分参加も歓迎します。

〇宿泊は各自でお取りくださるようにお願いいたします。

女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるというとらえ方をしています。性の多様化の中､「女性」という表現自体が問題視されることもありますが、タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

正義と平和委員会 ジェンダープロジェクトとは？

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年 3～4 回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの人が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたいと願っています。

タリタ・クムとは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です（マルコ 5：41)。今までジェンダーのために充分に発揮することのできなかった女性たちのさまざまな潜在的能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。